愛愛愛
土人祐

酪農学園だより

新春号
Vol.147

高大一貫プログラムで全人教育を目指します

聖句

願いなさい。そうすれば与えられ、あなたがたは喜びで満たされる。
ヨハネによる福音書　16章24節

RAKUNO GAKUEN UNIVERSITY
酪農学園大学
https://www.rakuno.ac.jp
公式サイト

酪農学園大学附属
とわの森三愛高等学校
https://www.san-ai.ed.jp
公式サイト

JIHEE since 2004 UNIVERSITY 2014

理事長 谷山 弘行

協

今日、教員と職員の関係が大きく変化する時代に入りました。改正大学設置基準(2017.3.31)は、教員と事務職員等が対等な関係で、教職協働への取り組みを進め、相互の連携協力の強化を求めています。これまで従属的存在として組織運営に関わってきた職員が、教員と同等の立場で運営に携わることになります。そのための大学や高校の事務組織に関わる規定改正や教職協働に関する規定の新設等に取り組んでおります。しかし、学園組織は、教員と職員のみで成り立っているわけではありません。もう一つのhuman resourcesである学生が参加する教職学協働の姿を、さらなる目標に掲げ、邁進してまいりたいと思います。

学長 竹花 一成

導

新年を迎えて皆様はいかがお過ごしでしょうか。新たな目標を掲げ、前進していることとお慶び申し上げます。

学長として社会情勢をしっかりと理解し、世の中が酪農学園に求めるものを大学構成員にしっかりと伝え、実行へと導くこと、大学という単一の世界での独自の判断ではなく、世の中の現状をしっかり見据えた大学運営の先頭に立って進めるべく、この文字を選びました。

大学構成員は今こそ社会の率直な意見を真摯に聞き、受け入れることが大事です。今それをやらなければ世の中から支援されない大学となるでしょう。他者の意見に耳を傾ける姿を皆が持つ様に導くことを進めます。

校長 西田 丈夫

象

今年は、発想や希望、私の追い求める姿を、具現化するという意味で「象」(すがた)を抱負としての一字とします。

人は理想、発想を抽象論ではよく口にし、意見交換することも多いのですが、いざ実現できるのかと問われればたじろぐ場面も多いのが実態です。要するに「言うだけなら簡単」なことですが、「有言実行」の難しさは誰もが認識することです。

今、私学、とりわけ高校教育は大きな岐路に立っています。建学の精神、教育の理想、我が学園の志を具現化し、社会に認知され、目に見える「象」(すがた)としてその存在を明確にすることが求められる時代です。具現化への決意を一字に託しました。

「酪農学園だより」が電子化へ

酪農学園だよりは、1969年に第1号を発行して以来50年、本学の歴史を物語る貴重な記録となっています。日ごろ本学をご支援いただいている同窓生をはじめ、企業、全国の教育機関、市町村に、最大時には年6回、現在は年2回（発行部数4万7千部）お届けしています。

2021年頃には、酪農学園だより「電子版」として、大学の公式ホームページにて公開していく予定です。

獣医学教育の国際化

EAEVE総会が行われたドイツ・ハノーバー大学にて

獣医学類では、ヨーロッパ獣医学教育機関協会（EAEVE）の国際認証評価を通じて、獣医学教育の質の保証と国際化に取り組んでいます。国際認証を取得することにより、本学の獣医学教育の質の高さが認められることとなり、パイオニアとして国内外でその存在が確立されることが期待されています。現在は、学内に推進室を設置して自己点検評価書の作成を進めており、2019年10月にはヨーロッパ本部による事前訪問調査が予定されています。

手術室映像記録配信システムを導入

手術室映像記録配信システム（カメラ、ディスプレイ、PC等）が10月、附属動物医療センターに設置されました。価格1,998万円のうち1,000万円は本学同窓生をはじめ多くの方々よりご寄付いただいた「獣医学教育充実支援金」を活用し、クリニカルローテーションなどの学生の臨床教育の充実を目的として導入されました。その名の通り、手術室（5つの小動物手術室と2つの大動物手術室）で実施される外科手術の様子と麻酔モニター画面を記録し、その映像を同センターに併設された臨床獣医学教育研究棟3階のvetOSCE室へ配信して、大勢の学生が同時に手術見学できるシステムです。記録した映像の編集も可能であり、教材としての有効利用が期待されます。

酪農PLUS+のマスコットキャラクターが「サンディー」に決定

月刊誌「酪農ジャーナル」の電子版としてリニューアルした「酪農PLUS+」のマスコットキャラクターが7月、静岡市在住のグラフィックデザイナー天野穂積さん制作の「サンディー」に決定しました。今後はさまざまなイベントに登場する予定です。

ホームページ　フェイスブック

金子教授ら北海道胆振東部地震の被害状況がわかるGISマップを寄贈

環境共生学類の金子正美教授（環境GIS研究室）、小川健太准教授（環境空間情報学研究室）、小野貴司研究員が、企業の有志と共に「北海道胆振東部地震緊急地図作製チーム」を組み、地震の被害状況がわかる地図を作製して厚真町役場に寄贈しました。

同チームの調べでは、地震による土砂被害面積は最低でも35平方キロメートルあることが確認され、NHKのニュースにも取り上げられました。

マップを手にする金子正美教授（左）、厚真町役場の宮久史さん（右）と学生たち

北海道ホルスタインウィンターフェアで1席

学生有志グループ「BREEDERS」が育てた牛、『RGU ルーシー ダイアモンド BR リリー ET（父:ダイアモンドバック）』が、10月28日に十勝農協家畜共進会場で開催された2018北海道ホルスタインウィンターフェア（審査員:パット・コンロイ氏）において、第8部（ジュニアウィンターカップ一生後6カ月以上10カ月未満）で1席を受賞しました。

リーダーの尾藤瑞菜さん（循環農学類3年）は、「昨年結成して初めて自分たちで管理した『ボス LD ハムエッグ ET（第5部未経産ミドルクラス一生後16カ月以上18カ月未満）』でも、2017年9月に安平町で開催された北海道ホルスタインナショナルショウで1等2席を受賞しています。自分たちで牛をいちから管理して共進会に出品し、上位を目指して頑張っています。また、交配から全ての管理を任せていただいていることに、とてもやりがいを感じています」と話しました。

前列左から山内雅人さん、森口巧さん、
後列左から尾藤瑞菜さん、野地真由美さん、橋本夕奈さん、久米睦子さん

本学の1年生が地元食材を使って食べるドレッシングを考案

食と健康学類の1年生が、地元の食材を使って食べるブロッコリードレッシングを考案し、10月13日に江別河川防災ステーションで開催された「第18回えべつ秋の特産味覚まつり」に400食の試食を提供しました。

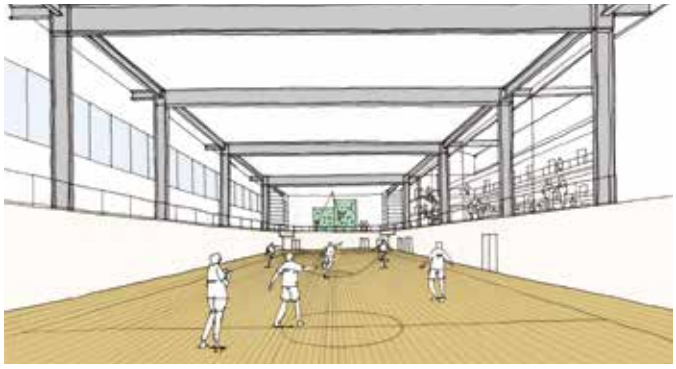
アイデアを考えたのは、写真左から山口雛さん、小玉あやかさん、小岡美紗代さん、東江結子さん。ドレッシングは2種類で、どちらも江別産のブロッコリーを使用し、一つはネギやトウガラシ、ごま油の香りを生かしたピリ辛味、もう一つは本学の牛乳やバターなどを使ったまろやかな味です。まつりでは素材のもつ栄養・味わいがそのままと好評でした。

今後の目標は、商品化に向けて2020年3月までに江別市内の商業施設に出品することです。

多目的体育施設2020年3月に完成予定

1962年に建設された第2体育館が、老朽化に伴い新しく多目的体育施設として生まれ変わります。

アリーナ、部室、合宿所の3つの用途が複合する施設です。



アリーナイメージ図

ホールイメージ図

2019年度の校名変更と通信制課程「農業に関する学科」設置について

2019年4月から、校名を「酪農学園大学附属とわの森三愛高等学校」に変更します。世界共通の課題である農業・食料・環境・生命分野で、第一線を歩む酪農学園大学との高大連携をより一層強化し、社会発展に貢献できる人材を育てます。また通信制課程では、全国初の試みとなる「農業に関する学科」設置に向けた認可申請準備（2020年4月開設予定）を進めています。近年、日本を取り巻く諸環境は大きく変化すると同時に、教育や農業に対するニーズも変革が求められています。通信制で新たに農業科を設置することで、酪農学園の優れた学習環境と施設を活用し、全国から農業に興味・関心のある生徒を「未来の農業人」として育成する土壌を整えます。

女子ソフトボールU-18日本代表選出

トップアスリート健康コース3年生の中川唯さんが、女子ソフトボールU-18日本代表に選出され、2019年アメリカ合衆国で開催される世界女子ジュニア選手権大会に出場します。中川さんは、走攻守のバランスのとれた万能型選手。足の速さを生かした走塁と守備範囲の広さ、打撃ではコンパクトで鋭いスイングとテクニックを駆使し、バント出塁からホームランまで打てる打力を持ち合わせています。9月に静岡県で選考会が開催され、63人中17人の代表枠を勝ち取りました。卒業後、全国優勝の実績もある道外の大学に進学し、ソフトボールを継続する予定で、その競技力にさらに磨きをかけます。今後の活躍を期待しています。

男子ソフトテニス部が北海道勢初となる国体準優勝

10月に福井県で開催された「福井しあわせ元気国体」のソフトテニス「少年男子の部」に、北海道代表として本校から4名（藤田大輝さん、亀田隆介さん、佐藤竜斗さん、守屋優人さん）の選手と監督として播磨良信教諭が出場し、北海道勢としては初となる準優勝を果たしました。4名は、8月に行われたインターハイにも北海道代表として出場し、団体戦ベスト16の成績を収めており、日ごろから「全国優勝」を合言葉に日々の鍛錬を重ねていました。卒業後は各々道外の大学に進学し、ソフトテニスを継続します。

普通科2年生の研修旅行報告

10月下旬、普通科2年生が研修旅行を行いました。**獣医・理数コース**は沖縄へ。沖縄が抱える米軍基地問題から「平和」の在り方を学習し、美ら海水族館では酪農学園大学OBの植田獣医師から講義を受け、また琉球大学生物学部の学生たちとの研究発表交流を行いました。**フードクリエイトコース**は韓国に。現地高校生との交流はもちろん、韓国伝統料理作り、また市場見学を通じて、食に関わる日本との違いを徹底的に学習してきました。**トップアスリート健康コース**は東京に。強化指定部各競技の強豪大学や実業団を訪問し、合同練習を実施。今後のパフォーマンス向上への大きな刺激となりました。筑波大学「野性の森」では、グループワークとキャンプ実習を行いました。想像力や団結力を醸成するとともにクラスの絆をさらに強めました。**総合進学コース**は沖縄と台湾の選択制。沖縄では平和学習をはじめ、沖縄の自然・観光・文化を満喫。初の試みとなる民泊体験も実施し、心温まる交流が持てました。台湾では現地高校生との交流を行うと同時に、故宮博物館や九份見学、台北市内自主研修など台湾の歴史・観光・食を堪能しました。

11月21日には旅行報告会を実施。各コースの代表者たちが旅行の目的や学んで得たこと、旅の思い出などをスライドで発表。生徒たちは、楽しかった旅行を振り返るとともに、他コースの取り組みも具体的に知り、見聞を広める良い機会となりました。

沖縄美ら海水族館にて植田獣医師と

韓国にて伝統料理を作る

「北海道と東北から食の場を世界へ」
出会いで人は変わる!蝦夷の津軽侍は北海道・東北・世界を繋ぐ!!

今回は、株式会社蝦夷ホールディングス代表取締役・株式会社ルンゴカーニバルグループCEOの相馬慶一さんにお話を伺いました。

「北海道と東北という垣根を超え『人と人とを繋ぐ食の場』を東北蝦夷に創造し続けること」をミッションに、北海道10店舗、東北4店舗、九州2店舗、タイ4店舗と飲食事業を展開しています。

株式会社蝦夷(えみし)ホールディングス　代表取締役
株式会社ルンゴカーニバルグループ　CEO

相馬(そうま) 慶一(けいいち) さん

酪農学部　食品流通学科　2002年卒業

プロフィール

- 1979年(昭和54年)10月16日生まれ
- 出身地:青森県弘前市
- 出身高校:青森県立弘前実業高等学校
- 会社概要:2005年に独立したのち、2009年に北海道内で株式会社ルンゴカーニバルを設立し、道内に北海道・東北の食材にこだわった飲食店を10店舗展開するまでに成長させる。その後、2018年にルンゴカーニバルを包含し北海道と東北を軸にする新規法人の株式会社蝦夷ホールディングスを立ち上げ、東北地区で「農家と漁師の台所 北海道レストラン」を展開中。

酪農学園大学を選んだ理由・学生時代

酪農学園大学を選んだのは、高校で熱中していた野球を続けたかったということと、生まれ育った弘前から離れて自分を変えたいという理由でした。さらに、大学のパンフレットを見て広大なキャンパスに憧れを抱き、芝生でボーっとして癒されたいという思いがありました。大学の素晴らしいキャンパスには自由や癒しがあると思います。

大学入学後は、正直あまり勉強はしませんでした(笑)。入学した食品流通学科には、硬式野球部の部員が多くいました。当時の硬式野球部は選手のリクルーティングにも力を入れていて、部員が80人くらい所属していました。2年生の春から札幌学生リーグで1部に昇格となり、札幌ドームで試合があったのも良い思い出です。

3年生になって尾碕亨先生のゼミ(物流科学研究室)に入りました。卒業論文は好きなスポーツ関係から「メンタルトレーニング」をテーマとしてまとめました。学生時代はもっぱら飲食店でアルバイトをしていました。大学の勉強も重要ですが、アルバイトでの経験や出会いが社会勉強となり、その後の人生に大きな影響を及ぼしました。

大学卒業後、農業資材などを扱う会社に就職しましたが、1年半ほどで退職して飲食店で仕事を始めました。

2018年10月に新規開店した
「農家と漁師の台所 北海道レストラン山形店」

北海道真狩村金丸農園直営 野菜居酒屋ルンゴカーニバル

左から近藤一系さん、相馬慶一さん、金丸将樹さん

起業から現在に至るまで

弊社は、「蝦夷ホールディングス」といい、蝦夷とかいて「えみし」と読みます。自然に囲まれながら心身共に鍛えられた東北、そして、大学生・社会人の人生の転換期に大きな心と土壌で受け入れてくれた北海道。東北と北海道の垣根を超えて「人と人を繋ぐ食の場」を東北蝦夷に創造し続けることを目的としています。それにより、東北と北海道に少しでも恩返しができればという気持ちがとても強いです。

現在、グループ内の店舗は概ね順調といえますが、必ずしも最初から順風満帆に事業を拡大してきたわけではありません。25歳の時に、自己資金4万円しか無いながらも独立を果たしましたが、2か月後に考え方の相違から社員が全員退社してしまう憂き目にあったり…。タイに進出するも食中毒に何度もかかり体調を崩したり…。念願果たして、出身地である東北に進出するも、前金を支払済みの内装業者が失踪したり…。もう、これだけで一つのドラマが作れそうなくらいエピソードに事欠かないです（笑）。

しかし、これらの危機を乗り越えることができたのは、様々な場所や場面で人との出会いがあったからだと思っています。そのことから、私は「何をするかよりも誰とするか」ということを常々考えています。

大学での出会いの一つに、仕事のパートナーである近藤一系（酪農学部食品流通学科2003年卒業）との出会いがあります。彼は、大学の硬式野球部のチームメイト・後輩であり、現在はルンゴカーニバルの事業を継承して代表取締役を担っています。彼は羨ましいほどにスター性・カリスマ性があり、人を惹きつける魅力がある素晴らしい人物です。

また、当時の硬式野球部髙山基樹監督から紹介され、真狩村で農業を営む金丸将樹（短期大学部酪農学科2006年卒業）と出会いました。紹介されたときは、「何か面白いことをしたい！」「真狩に農業大学をつくりたい！」と話が飛躍しがちでしたが、「農家直営の店舗を札幌に！」というコンセプトが決まってからはあっという間に現実的な話が進み、札幌駅北口から近い一等地の「北海道真狩村金丸農園直営 野菜居酒屋ルンゴカーニバル」が誕生しました。金丸農園はグループの自社農園として全店舗に野菜を供給しています。

もし、酪農学園大学に行かなければ、近藤や金丸とも出会わなかったでしょうし、今の仕事もしていなかったかもしれません。出会いを大切にすることもさることながら、お互いを利用するのではなく、お互いの強みを信じて任せるということがもっとも大切なのだと思います。

今後の目標

私は、出身地である青森県に魂があり、津軽人、弘前人なのです。スーパーで青森県産の品物があると見るだけで嬉しくなります。それもあって、「蝦夷の津軽侍」と自称しています。そして、蝦夷つまり北海道と津軽、育ててくれた北海道と生まれ育った東北の商品力と人間力を、今後は、北海道と東北以外の地域へ広めたいです。

しかし、それは私一人の力ではできません。人と人とが繋がらなければ実現できないと考えています。まずは、東北・北海道地区で基盤を構築したうえで、蝦夷ホールディングスのミッションやビジョンである、「人と人を繋ぐ食の場」を創造し続けたいと考えています。

酪農学園の後輩に一言

「まずやってみる」を心がけてほしいと思います。どんなに考えても実際に行動に移してみないと答えが出ないこともあります。私は「1歩踏み出す勇気よりも、0.1歩踏み出せる行動力」が優先されるべきと常々考えています。まずは恐れずに少しでもよいので行動してください。

そして、大学での出会いを大切にしてほしいです。酪農学園大学は全国各地から個性的な学生が集まります。

まずは行動をおこし、出会いを大切にする。それだけで、どんどんと新しい世界が広がっていくことでしょう。まずやってみる！まずは0.1歩を踏み出してください！

北海道レストラン山形店スタッフとの記念写真

酪農学園大学オリジナルワイン プロジェクト(ROWP)の活動について

今年度、3年目を迎えたオリジナルワインプロジェクト(ROWP)の活動について、学生代表の髙橋宗一郎さん(酪農学研究科食品栄養科学専攻博士課程1年)にインタビューしました。

ROWPとは?

酪農学園大学オリジナルワインプロジェクトは2016年4月に設立された課外活動団体です。Rakuno Gakuen Original Wine Projectの頭文字をとって、ROWP(ロープ)と呼んでいます。現在は大学1年生から大学院生まで、所属や学年の異なる学生が集まって活動しています。

作物生産ステーションのブドウ畑(ピノ・ノワール)にて

活動内容は

「学内ブドウの管理」、「学外農場の共同管理」、「ワインラベル作製」という3つの大きな柱があります。学内の畑には、キャンベル・アーリ、ヒムロッド、ピノ・ノワールの3種類のブドウが植えられており、北海道ワイン株式会社の小林千洋営農部次長(本学OB)にご指導いただきながら、ブドウ苗の管理を行っています。特にピノ・ノワールは活動が始まった時に植えたもので、プロジェクトと共に成長してきた存在。それが一年ごとに多くの実を付け、糖度も上がり、着実に育っていることを実感しています。

2018年度完成ワイン

砂川市の高橋農園にてブドウ栽培の作業

今年度から本学OBで砂川市に農園を持つ高橋祥二さん(写真前列右から3人目)の農場を共同管理させていただいています。主に土曜日に農場を訪問し、ソーヴィニヨン・ブランの苗管理をお手伝いしながら、現場での実践的なブドウ栽培・管理方法を学んでいます。

そして、学内のキャンベル・アーリを北海道ワイン株式会社に委託醸造する際のラベルを毎年自分たちで作製しており、今年度は1年生のメンバーがデザインしました。ラベルは、その年のワインの特徴を表す顔であり、メンバー全員がその完成をいつも楽しみにしています。

2016年のROWP初のヴィンテージワイン完成報告会には新聞社やテレビ局の取材が多く入りました。2018年9月には、札幌パークホテルで開催されたMatching HUB Sapporo 2018にブース出展し、本学オリジナルワインのPRや活動紹介を行いました。さらに、FacebookやTwitterを活用して日常的な活動を情報発信しています。

札幌パークホテルにてブース出展

将来的には

ROWPの活動意義は、栽培、醸造、製品化を学生の手で行うことにあります。このため、少しずつ規模を拡大しながら、学生の手が触れる工程を増やしてきました。ブドウ畑からおいしいワインが出来上がるようになるまで時間を要するように、一朝一夕の活動では達成できません。いずれは、酪農学園大学で栽培されたブドウを100%使ったオリジナルワインの醸造を目指していきたいと考えています。

聖句解説　とわの森三愛高等学校　宗教主任　肥田 信長

今年度は全国的に多くの災害に見舞われた年でもありました。苦しみを抱えている方々に祈りだけではなく、手を差し伸べ、寄り添っていくことも忘れてはなりません。

悲しみが喜びに変わることを願う時、結果ができるだけ早く出るようにと求めてしまうことがあります。聖書をよく注意してみると、ここには“あなた”ではなく“あなたがた”と書かれています。神さまは、“あなた一人”だけが良いのではなく、周りの全ての人に対しても良い状態を求められているのです。

新しい年を迎え、喜びを感じることもあると思いますが、悲しみの中にいる人の視点も忘れてはなりません。私たちも日頃の行動を見つめなおすチャンスでもあります。全ての人が喜びで満たされる方向は、どの方向なのかを見つめ、与えられる方向に向かって歩みだす時としたいものです。

酪農学園だより Vol.147
2019.1.15

発行:学校法人酪農学園
酪農学園大学／大学院／とわの森三愛高等学校

編集:入試広報センター　広報課
〒069-8501 北海道江別市文京台緑町582番地
TEL(011)388-4158　FAX(011)388-4157
HPアドレス:https://www.rakuno.ac.jp
E-mail:koho@rakuno.ac.jp

印刷:社会福祉法人 北海道リハビリー

※本紙の内容を無断で複写・複製(コピー)することを禁じます。